

小笠原の固有森林生態系を脅かす外来植物

アカギ編

小笠原諸島森林生態系保全センター



小笠原諸島には、貴重な野生動物が生息・生育していますが、過去に移入等された外来種がその分布域を拡大し、小笠原の固有森林生態系に影響を及ぼしています。母島においては特にアカギという外来植物がその旺盛な生命力から猛威を振るっています。

となり、その需要を満たすことを期待されて一九〇五年以前に移入されました。過去の調査では8年目には生長良好な個体は樹高11m23cm、胸高直径21cmに達したとの記録が残っており、小笠原の土地に適應できる優良な樹種であることが示されています。

攪乱です。この攪乱を契機にアカギの分布は急速に拡大し、母島の代表的な森林である湿性高木林にも侵入しました。アカギは在来の樹木に比べて生長力、繁殖力が旺盛で、大量の果実を生産し、落下した種子の殆どは当年に発芽し、一度定着してしまえば暗い林内でも生き続けることが可能です。また、萌芽再生力にも優れ、幹や枝が折れてもすぐに再生してしまい、一度定着すると永続してその場が占有されてしまいます。このような特性から、アカギは小笠原の固有森林生態系を脅かしています。

アカギは、コミカンソウ科アカギ属の常緑高木で琉球、台湾、中国などに分布しています。戦前の小笠原ではサトウキビからの精糖や鯉節製造等にあたって大量の薪炭材が必要

当初、その分布は植林地の周辺に限られており、固有森林生態系に大きな影響を与えることはありませんでした。しかし、その状況が一変したのは一九八三年の大型台風による

小笠原諸島森林生態系保全センターではこのアカギを抜き取りや伐倒のほか、形成層を剥がして枯らす巻枯

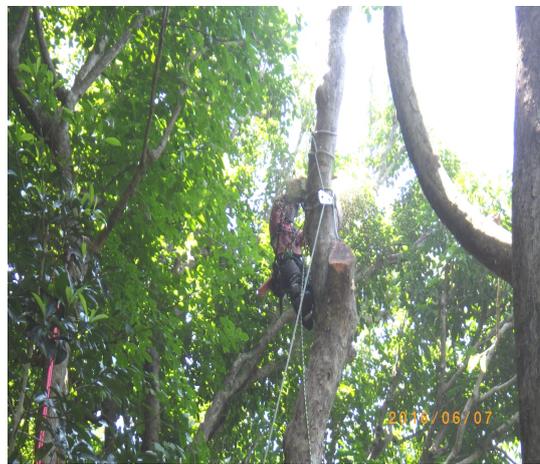
らしなど様々な方法で駆除を実施してきましたが、アカギの生命力はすさまじく、巻枯らしから再生する個体も出ていました。そこで、近年では安全な薬剤であるラウンドアップという農薬を樹幹に注入する薬剤注入という方法を主流にアカギの駆除に取り組んでいます。また、木が倒れて危険な箇所や下層に希少な動物がいる箇所については人が樹木に登り、先の方から徐々に切りおとしていく特殊伐採方法で環境に配慮しながら実施してきています。こうした努力の結果、少しずつですが固有森林生態系が回復してきています。世界自然遺産にも登録されたこの小笠原の素晴らしい自然を後世に残すため、今後も邁進してまいります。



広がるアカギ



丸太からも再生するアカギ



特殊伐採



固有森林生態系への回復